
洋書紹介

A Guide to Discipline

by Jeannette W. Galambos

1969 by the National Association for the
Education of Young Children

江波 諄 子

NAEYCから出版された三十二ページの小冊子である。子どもに毎日触れる幼稚園や施設の先生、それに家庭のお母さんむけのわかりやすく、愛情深い内容の本である。具体的な場面を例にとりながらも、その中に著者の子どもとつき合う上での強い哲学が、やさしく表現されて貫き通っている。著者は、「しつけといってもこの本は、子どもを罰したり、力づくでコントロールするのではなく、子どもが自分を尊敬し、他の人にも尊敬の念をいだくことができるように教える本である」という。

そして、「先生ということばは、子どもに触れるすべての人の意味する」と前置きしています。つまりお母さんも、バスの運転手さんも、清掃する人も、幼稚園の先生も、ヴォランティアの人々も。

子どもをしつけるのには、手荒い方法やただ愛情のみを表現したりなどいろいろな方法があるが、「よき先生とは、よきコントロールとしっかりしたしつけができればならない」と著者はいっています。「先生はしっかりとし、観察深く、おだやかでしかもよきユーモアのセンスを持ち、ひとりひとりの子どもはそれぞれ違うという認識の上で、彼女の意志を貫くことである。そしてその意志は、常に子どもの顔や声の敏感な変化の中から出てくるものでなければならない」

さて、「私たちは先生としての自分が好きでしょうか」と著者は最初の質問を問いかける。

「子どもを扱っているかぎり、私たちは誰でも、よい日とうまくいかなかった日を経験しています。自分が高い理想を持っていても、それを実行するのにはあまり疲れすぎていたり、子どもたちが乱れすぎていたりすることもあります。子どもをよく理解する人々は、子どもは動くようにできている、注意をむけてやったり、ほめてあげるのが大切なのだ、そして子どもたちはある日赤ちゃんのようにふるまったかと思うと、次にはもう成長している、これが子どもの本来の姿であるということを知っている。けれど学校のような集団の場では、今後は子ども自身が自分をコントロールしたり、規律を受け入れなければならぬのが集団の特性なのです」

最初の質問の中で著者は、最も大切なことは「先生自身が自他とも真に信頼、尊敬する中で子どもたちもそのように育っていくのだ」という。「先生がよきコントロールと愛情の中で教えているのかどうかの問題なのだ」といつているあたりは、まさに清水エミ子さんの説く愛と規律の保育ということになるのである。また、子どもたちが幼い時代にお互いに人間として尊敬できるようになるよう強調して説く部分は、E・Hエリクソンの始めの二つの発達段階、信頼と不信、自律と疑いの時代

にも匹敵しよう。

第二に、「私たちは幼稚園でのいろいろな問題を避けるために、事前に何ができるでしょうか」と問う。それには、

① 幼稚園で子どもたちが来る前に、先生は自分自身に十分な時間を与え、精神的になごやかなふん囲気で子どもを待つこと。② 子どもたちが来たら、彼らにも十分に自由を与えるようなよいプログラムをたてること。③ いつも魅力的に準備されたへや(適度に整理され、適度に新鮮な遊具が出されるへや)かどうか調べてみることに」

の三つを大きくあげています。

「こんなふうにしても、いろいろなトラブルは起こることは確かなのです。子どもがへや中を走りまわり、人や物をけつていたらどうしましょう。先生はまず静かに子どもを落ち着かせます。子どもはわかるのに時間がかかるかもしれないけれど、またいなづまのようにすぐにわかるかもしれない。先生は子どもがなぜそんなに落ちつきなくふるまうのかおなかがすいているのか、何かこわいのか、おもしろくて興奮しているのか、それとも何となく高揚しているのかを考えてみます。そして、その子の手をしっかりと握りながら、やさしく、威厳をもって、まず彼は何をしたらよいか方向づけながら話します。しばらくの間はその子どもと一緒に過ごし、彼に深い興味を示

しましう」

それではへやのすみっこで何にもしない子がいたらどうしましう。

「彼は気分がよくないのか、家で叱られたのか、引っこみ思案なのかいろいろ考えます。ともあれ彼は何となくその時は無力に感じているのです。そんな時、周開からとやかくいわれても元気は出てこないものです。多分、よき先生は、そのままの彼を受け入れ、彼の調子にあわせ、おだやかな規律の中で彼に手をさしのべたい気持ちを表わすことでしょう」

では、子どもがけつたり、たいたたり、ひっかいたり、投げたりしていたらどうしましう。

「こんな時先生は必ずその子どものそばへ行つて、面とむかつて話します。子どものいらだつ気持を理解しながら、荒々しい行動を阻止し、それに代わる身体的な遊びや運動へと導きます。パンチングバッグを出したり、外でボール投げをするのもよいでしょう。しばらくして子どもがおだやかになったら、子どもの体をやさしくつかみながら、彼がもう大丈夫であること、そして彼が何かいいたいことがあったらいつでも聞きましましうと告げます」

以上のように、子どもが何か望ましくない行動をした時は、必ず先生と子どもが一对一で面とむかい、適当な狭さの静

かな空間で、子どもの小さな体を大きな両手でやさしくしつかりつかみながら、深い愛情の中で冷静に話し合うことは、アメリカの幼稚園の教師の態度として特色のある点であるようです。私たちのこの手と目と声は、子どもとつき合う中で非常にとうとう道具にもなるし、またとり返しつかない深い傷をも残してしまいます。もっと、もっと大切に有効につかいたいものです。

最後の四、五ページに、著者は子どもとじょうずに話す方法を例をもつてあげています。その中からいくつかを選んで紹介してみましう。

●そんなに長く順番を待つのはつらいことだわ。三分したらそのトラックを彼にまわしてあげましようね。

●いいえトム・アリスは悪い子ではないの。ただ、今ちょっと、問題がおこつて大変なのよ。

●リサ、サミーの絵はただ、ぐちゃぐちゃ描いているのではないのよ。これが彼の描き方なの。彼が考えた方法よ。あなたも自分の方法があるでしょう。どちらでもいい方法なの。

●バートがひとりであそこにいるの。かまわないのよ、心配しなくても大丈夫。時々ひとりになって、ほかの人を見ていたり、きいていたりしたいことあるでしょ。

●ええ、ティムあなたが自分の名前書けるの知っているわ。でもバートは書けなくてもかまわないの。それは彼の好きなようにいいの、みんな自分のやり方であるでしょ。

●ジョージ、あなたがお父さんになりたいのわかるわ。でもね、この家に二人お父さんがいてもおもしろいわ。それに祖母さんもふたり、それとも、おじいちゃんがいいわ、おじさんがいてもいいわね。

●アリス、もう少し静かに泣いてくださいらない。あんまり大きな声で泣くとほかの人たちが驚くでしょう。泣くのはかまわないのよ。時々みんな泣きたくなりますもの。どうしたのか話せるようになったら先生に話してね。誰かアリスにティッシュペーパーを持ってきてくださいいな。

●彼に尋ねてごらんなさい。それをうばいとってもいいかどうか。誰もあんまりうばいとられるの好きじゃあないわね。きいてごらんなさい。彼は「いや」といった？ じゃあ何か他のものをさがしに行きましょう。先生も一緒に行くわ。

●アンソニー、あなたの考えとてもおもしろいので、もつときましたいわ。でもほかの子のお話も聞いているの。これが終わったら話してちょうだい。きっと聞くて、お約束するわ。

●ほかの子がお話している時は音を出さないことよ。アレンさん、マークとむこうのテーブルへ行ってくださいますか。

そこにパイプクリナーがあります。とってもおもしろいのよ。そこで静かに遊べるでしょう。

●バーバラ、あなたが今日お家からお人形持ってきたの知っているわ。とっても素敵ね。でも、ほかの子が見るとみんなさわったり抱いたりしたがるわ。先生も手伝うから、みんなにこわさないように見せてあげましょう。それからお家へ帰るまでどこかに置いておきましょうね。どこか特別よい所をさがしましょう。

●床の上に水があると、すべりやすいわね。ここにモップがあります。さあみんなでお水をふいてしましましょう。スポンジもここにあるわ。この次は注意してお水をくみ、あんまり一杯になる前にとめましょう。できるわね。

「しつけは単に、ことばとか、技法とか、規則で押しつけるものではなく、その時、その場のようすが大切なのです。……時には成功し、時には失敗もする。生身の若い人間である先生にとつて必要なのは、限らない理解とエネルギーの供給であります。でも時には、必要な時にそれらが無いこともあります。けれどそんなことは理想をあきらめる理由にはなりません。人間について、学ぶべき、受け入れるべきものはたくさんあります。私たちは時には、自分自身を許して、また新しくやり直してみるのです」と最後の章を結んでいます。